

## 不登校児童への有効な支援を目指して ～自立支援教室での実践事例の検討を通して～

那覇市立神原小学校教諭 友利 光一

### I テーマ設定の理由

那覇市の不登校に関する調査によると、平成27年度から令和元年度まで、小学校・中学校ともに不登校児童生徒数は増加傾向となっている。不登校の原因は一つとは限らず、発達的な特性や心理的な課題も相まって、より複雑化している。また、令和元年度から令和2年度には、新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行し、社会生活に多大な影響を及ぼしたことで「コロナ禍における不安」も不登校増加につながる可能性がある。児童生徒の適切な実態把握に努めながら、社会的自立に向けた支援を行うことが重要になってくると考える。

文部科学省は「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」において、「…個々の児童生徒に応じた決め細やかな支援策を策定することや、社会的自立へ向けて進路の選択肢を広げる支援をすることが重要であること」「不登校児童生徒が、主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、児童生徒自身を見守りつつ、不登校のきっかけや継続理由に応じて、その環境づくりのために適切な支援や働き掛けを行う必要があること」と示している。ICT機器を活用した「個に応じた学び」の学習スタイルが確立されつつある今、不登校児童生徒支援において、ICTの活用は必要になると考える。

学校現場においては、「指示が聞けない」「授業中、席に着けない」「突然パニックになり、キレたりする」「注意すると余計に問題行動を起こす」など様々な行動を起こす児童が一定数見受けられる。これらの行動をわがままだと決めつけ「ルールだから守りなさい」や「みんなはできているから、ちゃんとやりなさい」と一方的に押し付けるような指導を私自身行っていた。しかし、これらの不適応な行動は、発達の特性や心理的な側面から見ると、児童自身もどう行動していいか分からずに困っていたとも考えられる。一人一人の児童理解をしっかりと行い、不適応な行動を起こす原因となった背景を捉えた上で、支援を行う必要があった。

本研究では、支援者と児童との信頼関係を築くことで、気持ちの安定と、安心できる居場所を確保することによって学びへの意欲も促進されると考える。学習活動や体験活動を通して、規範意識の向上や児童の興味関心が様々なものに向けられるように工夫していく中で、「生物・心理・社会モデル」の3つの視点から多面的・総合的に児童の行動観察を行う。特に、心理的な要因のアセスメントを行う。「感情」に着目し、「愛着の問題」からみえる発達の特性を分析し、個性の伸長を図れば、個々に応じた支援につながると考え本テーマを設定した。

### II 研究目標

「愛着の問題」からみえる発達の特性の分析を行い、児童の困り感に寄り添いながら、個性の伸長を図る支援の在り方を構築していく。

### Ⅲ 研究仮説

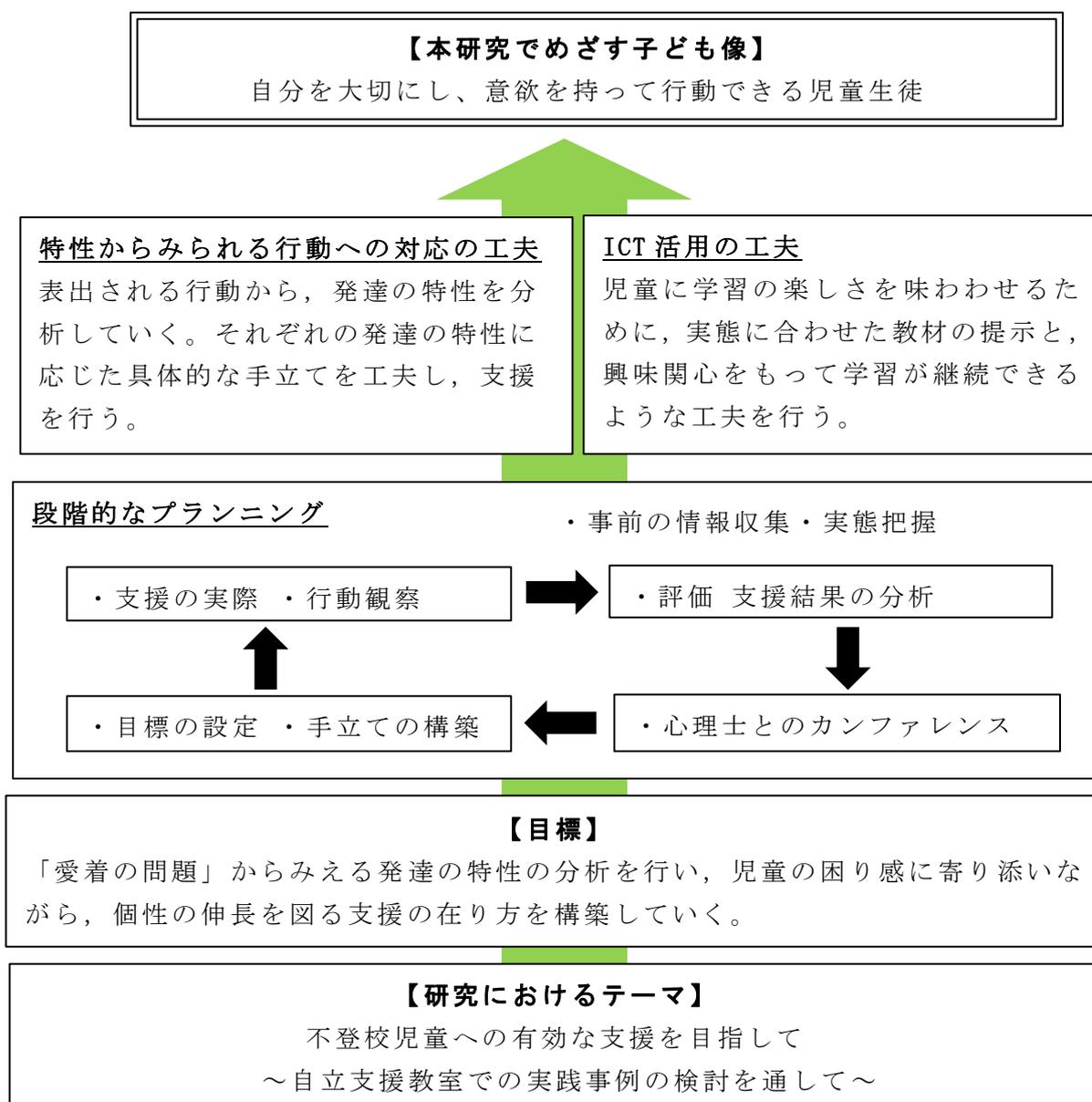
#### 1 基本仮説

「自分にもできた」「一緒に活動をして楽しい」「なぜ失敗したのだろう」という体験活動で得られる様々な経験を通して支援者と児童の信頼関係を深めることで、気持ちの安定と、学ぶ意欲を促進し、適切な行動につなげることができるであろう。

#### 2 作業仮説

- (1) 自分の思うような行動ができないことから痼癪を起こした際の行動を繰り返る場を設定し、自分の感情を整理、理解することで、適切な行動につなげることができるであろう。
- (2) 児童の興味関心を引き出す為に、ICT 機器などを活用し、スモールステップで段階的に学び、達成感を得ることで自信を持ち、意欲の向上につながるであろう。

### Ⅳ 研究の構想図



## V 研究内容

### 1 理論研究

#### (1) 「多動の表れ方」からみえる児童生徒理解の手立て

米澤 (2018)が提唱している「愛着障害」の理論を活用して児童の支援を考えていく。発達特性として、自閉傾向の特性「自閉症スペクトラム障害」(以下 ASD)と多動な行動をとる特性「注意欠如多動性障害」(以下 ADHD)が挙げられる。大きな違いは発達の特性が「先天的な脳機能による特性」であるのに対し、愛着問題は「後天的な関係性による特性」であること。「落ち着きなく動き回る「多動」という行動は、ADHD に特有の行動とされていることが多いが、ASD や愛着問題でも起こりうる行動である」と示されていることから、それぞれの特徴を併せ持った行動が表出される可能性がある(図 1)。発達の特性と愛着の問題を「現場で正しく理解し、見つける」ことが支援の第一歩と考える。それぞれの特徴の違いを示す(表 1)。

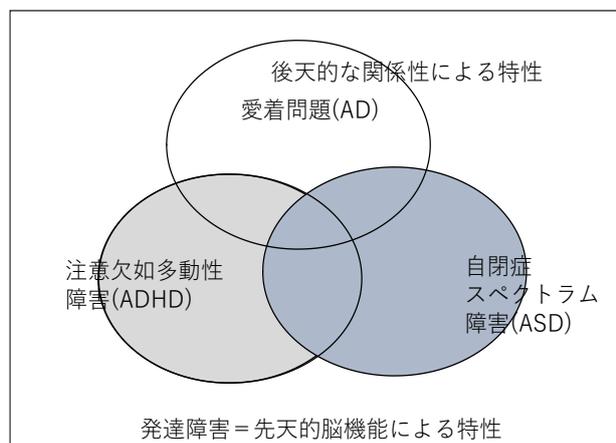


図 1 発達の特性と愛着問題の関係

表 1 多動の表れ方の違いと対応の手立て

	特徴	手立て
ADHD の多動	・場所や時間に関係なくいつでも起こる	○望ましい行動をした後、すぐに評価・報酬を与える「即時強化」 ○スモールステップでの支援。
ASD の多動	・居場所感の欠如が原因となる認知機能によって起こる  (例) 読書時間が終わったからといって、読みかけの本を取り上げられる。時間割変更で授業の場所が変わる等。	○予定を伝え、1日の行動を構造化するなど、順番を固定する。  【ASD と愛着障害を併せ持つ場合の手立て】 ・対人認知、自己認知が難しく、独特の理解をしているため、人間関係での支援に困難。 ・自分と他者の感情、どちらの認知も苦手。感情の混乱が起きやすい。 ・不適切な行動を抑制、禁止しようとする、こだわりを強化してしまう。
愛着障害の多動	・感情によって起こる  (例) 好きな教科では落ち着いているのに、嫌いな教科では多動になるといった「ムラのある」多動が特徴。	(例)「棒を振り回す」行動の場合 「あっ虫がいる！」と他のものを指さしてみたり、その子の好きな話題をしたりして認知を逸らす。落ち着いてきたら、「こんな気持ちでやったんだよね」と嫌な気持ちを確認し、別の行動に結びつけるような代替行動(ポジティブな行動)を示す。 (深呼吸、その場でジャンプなど)

それぞれの特性によって起きる「多動」の表れ方に注視することは、個別の支援を行う際の手立てになると考える。また、愛着の問題は、年齢が低ければ低いほど、不適応な行動として表れやすい。そこで、「多動」以外の行動の様子を観察する為のチェックリストも活用していく(表 2)。

表2 「愛着の問題発見チェックリスト」米澤(2018)

多動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛着障害＝〔ムラ〕のある多動</li> <li>・ADHD＝〔いつも〕多動</li> <li>・ASD＝〔居場所感〕喪失時に多動 (月曜日朝多動/週後半多動/午前午後の時間帯/教科/場所による多動)</li> </ul>
移行対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机や壁を触りながら歩く。机の周りにモノが散乱している。モノを振り回す。モノに囲まれていないと安心できない。</li> </ul>
口の問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・持っているモノを口に入れると安心する。(指も含む)</li> <li>・身体・衣服やハンカチ等を舐める。 (モノや指を噛む場合は不快な感情が強い)</li> </ul>
床への接触	<ul style="list-style-type: none"> <li>・靴を脱いだり、靴下を脱いだりする。</li> <li>※ASD→知覚異常のため靴下や靴との接触嫌って脱ぐ。攻撃行動では、先に床に寝転んでから転がって行って相手を蹴るといったような特徴がみられる。</li> </ul>
人への接触	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脱抑制タイプ べたっと抱きつく、まとわりつくように過度の身体接触を行う。体当たりに飛びつく、足下から滑り込む、抱きついておいて叩く、噛む等、近づき方にも特徴がある。</li> <li>・抑制タイプ 人間不信で警戒心が強いので身体接触はしない。 近寄られることも拒否する。特に前から後ろから近づかれることを嫌う。</li> </ul>
姿勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・姿勢の崩れ(後方にだらっと反り返ったり、机に突っ伏したりする)左右に体を揺らす。前後に揺らし椅子漕ぎ状態になる。手の指がしっかり伸びない。</li> </ul>
しぐさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・服装の乱れや季節に合わない服装(夏場に長袖を着る⇒安全の確保/冬場に上着を脱いで半袖や裸になったりすること⇒感情の紛らわせ行動)</li> </ul>
危険な行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机やロッカーの上など高い所に登る・2階以上の窓から下をのぞき込むなど。</li> <li>・ベランダや屋上など高い所に行ったりする(雲梯などの遊具では上に登ることも)。</li> <li>・投擲行動⇒ロッカーに立って消しゴムを投げる・窓からモノを落とす等</li> <li>・大きなケガをしても泣かないなど「痛さへの鈍感」</li> </ul>
愛情欲求行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・注目されたい行動、アピール行動 ちょっとしたケガで何度も保健室に行き絆創膏を貼ることを要求する 自分で落書きしておいて「廊下に落書きがあるのを見つけたよ」と報告するなど自作自演の事件を起こす。</li> <li>・静寂潰し行動 刺激のない状態を嫌い静かな教室でわざと机を叩いたり大声を出したりして音を出すなど。</li> <li>・愛情試し行動 わざと叱られるようなことをして相手がどんな反応するのか確かめる。</li> <li>・愛情欲求エスカレート現象 愛情をもらおうと「もっとして」「これもして」と欲求がどんどんエスカレートして止まらなくなる行動。</li> </ul>
自己防衛	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が悪い事をして誰かに見つかっても「やっていない」と否認する</li> <li>・トラブルが起こっても自分は悪くないと自己正当化する。</li> <li>・指導を行うと大泣きしてやりとりを拒絶したり、ヘラヘラしたりして、まともに応えようとしない場合もある。</li> </ul>
自己評価の低さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己否定タイプ 「どうせできない」とやる前から発言する</li> <li>・自己高揚タイプ(虚勢としての自信誇示) 自信に満ち溢れていて「できるよ!」と話す、実際にやることは拒否する 他人に影響力を行使することで自己評価を刹那的にあげることがある。例えば、人におごるという行為で感謝されることで自己評価をあげるなど。相手の反応を確かめる「愛情試し行動」も同時に行っている。</li> </ul>
片付け	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ADHDの場合 片づける場所と片付けの順番という一連の行動が完遂できない</li> <li>・愛着の問題がある場合 ADHDのように行動支援を行ってもできない 片づけたいたいという意欲がないからと考えられる</li> </ul>
関係性の視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛情の行き違い 欲求と授与のタイミングのズレ、特性に応じた対応の欠如 気持ちの確認漏れ</li> </ul>

## VI 実践事例について

### 1 理論と自立支援教室での実践(相談や体験活動など)

発達の特性があるA(小学校4年生 男子児童)

癩癢を起こしやすく、周囲とのトラブルが多い児童であるというアセスメントより、「イライラして癩癢を起こしたときによりよい行動をとることができる」を長期目標として設定した。また、児童の内面を知る手がかりとして、「自己肯定感と欲求充足に関する」アンケートを実施した。「学習面」に関することや「新しいことに取り組む際、上手くいかないと思う」という項目において、否定的な回答であったことから、学習面への不安や失敗することに対して何らかの意識が作用し、自己肯定感が低くなっているのではないかと見立てた。各月の短期目標を以下のように設定した。今回の研究では、初回月の3回目と4回目の支援、最終月の18回目以降の支援内容から検証していく。以下に全支援の様子を掲載する(表3)。

表3 対象児童への支援内容(初回月①と最終月②を検証)

n=1

【アセスメント】		
生物面: 発達の特性ASDの診断あり。 衝動的な行動をとることから、ADHDの要素もあると考えられる。 発達の特性からイライラし癩癢を起こすことがある。 状況理解が難しい面があり、周囲と本人の認識のズレが起こりやすい。		
心理面: 自己肯定感の低さが伺える(自信のなさ)		
社会面: 学校で対人関係のトラブルあり。		
支援目標	長期目標	イライラして癩癢を起こしたときによりよい行動をとることができる
	短期目標	活動を通して感情の伝え方、コントロールの仕方を考える
	短期目標	スポーツ活動以外の活動に取り組むことができる。学校での活動を位置づけ、先生方との関係性をつくる
	短期目標	好きな活動を通して気持ちの安定を図り定期的な通級ができる
1	体験活動は、スポーツ活動をがんばりたいと話す(特にサッカーをがんばりたい)	
2	担任の先生が活動の様子を見に来てくれた。関係性は良好である。	
3	① 活動中イライラしている様子が伺えたが、自分で気持ちを落ち着かせようとしている様子も見られた	
4	① 活動中、イライラしている。教室を飛び出したり、車の鍵を閉めて追い出す様な行動がみられた	
5	① 通級を拒否し、本人と話ができない状況	
6	① 通級を拒否し、本人と話ができない状況	
7	① 家庭訪問を実施。支援者の考えや思いを伝え、今後の活動について話し合った。	
8	① 元気な挨拶や、相手にボールを当てたときなど自然に謝ることができた	
9	① イライラして癩癢を起こしたときのことふり返っていた	
10	① 予定していた場所で活動が行えなかったが、気持ちを切り替えて別の活動を行うことができた	
11	① 「今年1年の楽しかったことは何?」と聞いてきた。本人の楽しかったことは話さなかった。	
12	① 冬期休業明けの最初の活動も元気に過ごすことができた	
13	① 「サッカー部に戻りたい」と学校の話題に関する自分を自分から話す	
14	① 中間月	コロナ感染拡大の影響を受け、支援休止
15		
16		
17		
18	② 教育動画を活用し学習を行う。帰りの車中で「自分はすぐ怒るからダメだな」とふり返る場面があった	
19	② ipadの学習アプリに興味を示し、活動の後半に学習を行う(約10分)	
20	② ipadの学習アプリに興味を示し、今回も活動の後半に学習を行う。前回より学習時間が多くなる(約20分)	
21	② 支援時間の配分を自分で行き、学習の時間も設定していた	
22	② 癩癢を起こした際に、どのような行動をとったらいいかを本人と確認することができた	
23	② 「学校の相談室で勉強をする」と、本人から話をする	
24	② 学校の相談室にて、先生方と顔合わせをし、学校に登校するという本人の意思確認を行うことができた	

## VII 結果と考察

### 1 「作業仮説1」の結果

自分の思うような行動ができないことから癩癩を起こした際、行動をふり返る場を設定し、自分の感情を整理、理解することで適切な行動につなげることができるであろう。

初回月支援(3回目, 4回目)の本人との会話をもとに行動を分析した。活動中は終始笑顔であった。どちらも、活動時間の終了間際に、本人から活動を続けたいと要望があったときの対応である。

	スポーツ活動	分析
会話の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「やった。7回できた。次は10回を目指したい」</li> <li>▲「7回もできるなんてすごいね。そろそろ活動終了の時間だよ。」</li> <li>○「嫌だ」</li> <li>▲「7回もできたから、すごいよ」</li> <li>○「もっとやりたい」</li> <li>▲「もう時間だからできないよ」</li> <li>○「もういい! 帰る」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人は、7回できたことを喜び、次は10回連続を目標に設定した。なかなか達成できないことに不満がでてきた。</li> <li>・本人の気持ちに対し、支援者は「すごいね」と褒めたが、本人は「10回できなくて悔しい」という気持ちがあったかもしれない。本人との感情のすれ違いが起こったのではないか。</li> <li>・本人は「自分の気持ちをわかってもらえない」という感情から癩癩を起こしたと考えられる。</li> </ul>
	学習支援(理科の実験)	分析
○本人 ▲支援者	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「別の実験もやってみたい」</li> <li>▲「もう時間もないからできないよ」</li> <li>○「嫌だ。やりたい」</li> <li>▲「時間だから片付けて、今日の活動の振り返りをやろうか」</li> <li>○「嫌だ。もっとやりたい」</li> <li>▲「時間だから、もうできないよ」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ活動以外で、本人がやりたいと取り組んだ活動。</li> <li>・空気鉄砲の玉を飛ばす工夫を教科書で調べたり自分で考えたりしながら、実験が上手くいったことで、学習に意欲的に取り組んでいる様子が伺えた。</li> <li>・終了間際に、「もう一つの実験をやりたい」と訴える。終了の時間が迫っているからできないと、本人の感情を考えずに直接的な言葉で返したことが、癩癩を起こした原因だと思われる。</li> </ul>

本人の思いと違ったことや自分の気持ちをわかってくれないと感じたことが、癩癩を起こした要因につながったと考えられる。「悔しかったね」「イライラするね」など本人の気持ちに寄り添った声掛けを意識して行った。その後は、目標回数をクリアできなくても、「もう少しだったね。悔しいね」と声掛けしたことで、自分の気持ちをわかってもらえたことで安心したのか、次の活動に進めることができた。

#### 【初回支援月を通して】

活動を通して、気になる行動が見受けられたので、「愛着の問題発見チェックシート」を活用し、内容項目と照らし合わせながら行動観察をした(表4)。

表4 気になる言動とチェックリストとの照合

本人の言動	項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・あと5分延長したいと、毎回要求する</li> <li>・教室のドアや車のドアの鍵を閉め、閉め出す</li> <li>・ペンや名札をとるなどのちょっかいを出す</li> <li>・スポーツ活動中、わざとボールを相手に当てる</li> </ul>	愛情欲求行動 <u>・エスカレート現象</u> <u>・試し行動</u>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ活動やレク活動において、勝負に負けそうになるとイライラする</li> <li>・「俺は上手だから、先生にはハンデをあげるよ」 「他のやつらは足が遅いから、どうせ俺が勝つよ」 「逆転されそう。もう本気出すよ」など自分の自己肯定感を守ろうとする為に、相手より自分が上であるという行動を示す。</li> </ul>	自己評価の低さ <u>・自己高揚タイプ</u>

本人の好きな活動には積極的に取り組むが、それ以外の活動の提案に関しては、素直に聞き入れない様子がみられ、活動に取り組まないこともあった。好き嫌いによる気持ちの「ムラ」によってイライラしている様子や本人の欲求がどんどんエスカレートしたり、教室のドアや車のドアにカギをかけて、支援者を閉めだしたりするというような「試し行動」も多くみられたことから、愛着問題に係る多動傾向であると考えた。愛着の問題も、本人の特性として含まれている可能性があるから見立て、最終月の支援では、以下に示す内容の支援方法も取り入れながら進めることとした（表5）。

表5 愛着問題に視点をあてた支援方法(米澤 2018)

禁止・叱責をしない	「〇〇しちゃダメ！」感情混乱を引き起こす原因になり、不適応な行動の促進につながる可能性がある。「これをしよう」と本人が許容できるような提案や誘導することを基本とする。
感情ラベリング支援  (行動⇒認知⇒感情をつなぐ)	<p>自分の気持ちを認識することに困難が生じる為、感情学習のプロセスで行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>➡ 何をしたら(行動)何が起こって(認知)どんな持ちになったか(感情)</p> </div> <p>ポイントは、その感情になったとき、だれと一緒に感じる事ができたかを確かめることが大事。</p>
感情先取り支援	「こんな気持ちだよ」と本人の感情を推測し、本人と共有する。気持ちをわかってもらえた感を高める効果をねらう。

愛着の問題を抱えている場合、「感情とのかかわり方」について、何をしたらどんな気持ちになったのかを教える感情学習が有効であると米澤は述べている。

最終支援月での活動では、毎回、写真とメッセージを使った「感情ラベリング支援ボード」を作成し振り返ることを行った(図2)。嬉しかった気持ちや頑張って取り組んだときの気持ちなどを、本人と確かめながら進めた。ある日の活動後には、これまでのことを振り返るような発言があり、一人言のように「自分はすぐ怒るからダメだな」「今日はケンカしなくてよかった」とも話していた。自分の行動を客観的にとらえていた。

また、感情をコントロールするアンガーマネジメントの取り組みを本人と確認した。イライラしたときにどの行動をしたら落ち着けるかを尋ねたら「まくらをギュッとするか、粘土をこねるならできるかな」と答えた。また、お家でイライラした時は、散歩に出かけたり、落ち着くまで一人になったりすると、これまで自分で実践してきた方法も話していたことから、痼癪を起こした自分と、向き合っていることがわかった。

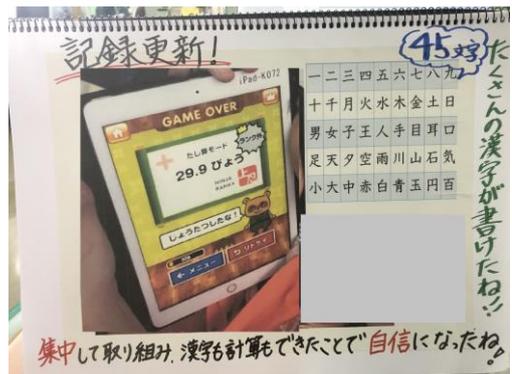


図2 感情ラベリング支援ボード



図3 『イラスト版子どものアンガーマネジメント』より

## 2 「作業仮説2」の結果

児童の興味関心を引き出す為に、ICT 機器などを活用し、スモールステップで段階的に学び、達成感を得ることで、自信を持ち、意欲の向上につながるであろう。

### 【最終月支援を通して】

中間支援月の後半から、タブレットを活用することを意識し支援計画を立てた。タブレットを使った学習に興味を持ってもらえるように、「サッカーが上手になるためのポイントを調べよう」という活動を設定した。教育動画サイトを視聴し、技のポイントをホワイトボードにまとめたり、自分なりの工夫を話したりするなど、意欲的な様子がみられた。

その後の活動では、タブレットを使っての学習にも取り組むようになった。内容は1年生の計算(一桁+一桁)と漢字の書き取りを自分で選択した。初めの頃は、10分から15分程の学習であった。計算アプリだけの学習から、3回目からは、漢字の書き取りにも取り組むようになってきた。タブレットのタッチパネル機能を使うことで文字を書くことに対する抵抗が軽減されたことは、本人にとって取り組みやすい学習スタイルであると感じた。

問題を解くスピードが速くなったことや、より多くの漢字が書けたことで「できた」という自信になったと思われる。自宅のスマホにも計算と漢字のアプリをダウンロードして「家でも、やってみたい」と話すなど、本人の行動にも変化が見えてきた。

タブレットを活用し、客観的に自分の行動を捉えることで自信になり、スポーツ活動以外にもチャレンジできるようになってきたのではないかと。そして、行動に移せたことが、学校へ登校したい、勉強をしたいと思えるきっかけになったと考える(表6)。



図4 タブレット学習の様子



図5 学習アプリを使って

表6 最終支援月の本人の行動変化

①	シュートフォームの動画を撮影し客観的に見ることで、自分のイメージ通りのフォームになっていたことで、自信を持てた様子が伺えた
②	ボールの蹴り方を、動画を使って支援員に説明していた。きれいに曲がるシュートを決めることができ、さらに自信になったのか、サッカー部にもう一度入りたいと話す。
③	教育動画サイトを活用して、ホワイトボードに技のポイントをまとめることができた。実際の練習では、自分なりの工夫も取り入れながら行う。
④	学習アプリにチャレンジした。 間違えても何度も挑戦し、計算のスピードが徐々に速くなった。
⑤	本時の活動時間の配分を自分で決め、学習の時間もちゃんと設定していた。
⑥	プロサッカー選手になるためにはどうしたらいいのかを、インターネットで調べていた。
⑦	自立支援教室での支援が終わった後、学校に行って勉強すると話す。

### 3 考察

今回の研究は、「愛着問題」からみえる発達の特徴を、「感情」から読み取って分析し、個性の伸長を図る支援の在り方を探っていくことを目的とした。

「イライラして癩癩を起こしたときに、行動をふり返り、自分の感情を整理、理解することで、適切な行動につなげることができる」「ICT機器を活用して、興味関心を引き出すことで、活動の場を広げることができる」という2つの仮説を立てて検証を進めてきた。

毎回の支援をふり返る「感情ラベリング支援ボード」は、写真やメッセージ、動画等も使って伝え、その時の感情を一緒にふり返ることで、次のより良い行動へつなげることをねらいとした。その日の支援では、笑顔で活動を行うことができた。しかし、すぐに改善は見られず、別の日には、自分のやりたい活動をアピールし、できないとイライラして癩癩を起こすといった行動を繰り返してしまう。そこで、スポーツ活動やレク活動を行いながら、癩癩を起こした時にどうすればよいかを伝えたり、活動と活動の合間で、今の気持ちを確認する時間を取ったりするなど、短い時間であるが気持ちの確認は続けた。その結果、「サッカー部に入りたい」という話を本人からするようになり、「その為には学校に行かなきゃ」から「学校に行って、勉強をしたい」と話の内容に変化が見られるようになった。また、タブレットを活用した学習に取り組んだことで、客観的に自分の成果を確認することができたことも、本人の行動が変わるきっかけになったのではないかと考える。

支援終了の際にとったアンケートの結果からも、全ての項目で肯定的な回答になっていた。特に「自分が好き」「何かに取り組むときには上手くいきそうな気がする」「勉強の内容がわかる」といった項目に関しては、自分に自信がつき、結果、自己肯定感も高まってきたのではないかと予想される。

#### (1) 今後の継続した支援に向けて

今回の研究では、癩癩を起こした時によりよい行動へと移すことまではできなかった。まだまだ、感情の「ムラ」による多動も見られることから、今後も継続した取り組みが必要である。今後の継続した支援に向けて、次のことに留意していきたい。

##### ①「注意・叱責の対応」について。

愛着の問題がある児童は、「してはいけない」といった注意・叱責を受けることで、口を閉ざしたり、または、相手より上に立ったりすることで自己防衛をしようとする。本人の気持ちに寄り添った「悔しかったね」「もっとやりたいね」などの言葉かけを行ったり、気持ちが落ち着いた後に「さっきのことはよくないね」とふり返りをしたりすることが必要になる。受容と傾聴をしっかりと行い、本人に寄り添いながら支援を進めていく必要がある。

##### ②「本人の要求に応えるだけ」の対応について。

本人の要求に応えるだけの対応は、結果として愛情欲求をエスカレートさせることにつながることもわかった。愛着の問題を持っている子どもは、自分の気持ちや他人の気持ちを理解することが難しい。「これをしよう！」と本人が許容でき

るように提案や誘導をしていく。本人との信頼関係を築くことで、支援者の考えと本人の思いに対して折り合いをつけることも可能になると考える。

### ③「保護者や学校，その他の関連機関との連携」に向けて

子ども理解をより正確に行う為の視点として，その子の行動面から判断することは有効であると考え。障害によって起こる「多動」の違い，日常の行動の様子から問題を発見する手立てと，その対応の仕方を知ることはよりよい支援につながる一助となる。「愛着問題」への対処法を調べ実際に支援で活用したが，専門的な視点での支援は必要である。心理士等との連携を図ることでより手厚い支援ができると考えられる。また，愛着に課題のある児童にとって，より身近な存在である保護者との関わりも重要になる。安心・安全に感じる居場所と同じように，安心・安全と感じる人とのつながりも大事である。保護者と支援者の考えを共有し，一緒に支援を行える体制をつくることは，本人の気持ちも安定し，安心して活動が行え，早い段階で望ましい方向に進む可能性が高いと思われる。学校，家庭，支援機関での三位一体となった支援が必要である。

## VIII 成果と課題

### 1 成果

- (1) 発達的な特性を踏まえた視点で行動を分析し，本人と一緒に活動の様子をふり返ることで，自分の行動を捉えることができ，これからの自分自身を考えるきっかけになった。
- (2) ICT 機器を活用し，客観的に自分の成果を確認できたことで，自信を持つことができ，学習に興味を持つなど活動の場を広げることができた。

### 2 課題

- (1) 本人の思いと，支援者が考えている支援の方向性を合わせていくためにも，体験活動など，支援の目的をどのように共有していくかが課題である。
- (2) 継続した個性の伸長を図るためにも，家庭との連携が必要であると感じた。その為にも，専門的な関係機関とも関わり，連携をどのように活用していくかが課題である。

#### 《主な参考文献・引用文献》

「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（令和元年 10 月 25 日 文部科学省初等中等教育局長）

『小学校学習指導要領 総則編』	文部科学省	東洋館出版社	2017
『生徒指導提要』	文部科学省	教育図書	2010
『選択理論を学校に』	柿谷正期		
	井上千代	ほんの森出版	2020
『やさしくわかる！愛着障害』	米澤好史著	ほんの森出版	2021
『事例でわかる！愛着障害』	米澤好史著	ほんの森出版	2021
『イラスト版子どものアンガーマネジメント』	篠真希長縄史子	合同出版	2021